
嘘つき少女。

チェシャ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき少女。

【Nコード】

N0408X

【作者名】

チエシャ

【あらすじ】

嘘をついて生きている少女と学校一爽やかな少年との甘くて切ない恋の物語。

プロローグ

プロローグ。

恋って、なんだろう。いまだにわからない十六歳。でも知りたいとも思わない。だって周りの友達はずらい思えばっかりしてるんだもん。そんなんで面白いの？てかそこまでして恋したいの？、って聞くと、「そこがいいんじゃない！今青春してます！って感じがいいじゃん！！」と力説されてしまった。

「ごめん、よくわかんないや……。」

知りたいとも思わない。ううん、違う。嘘ついてる。本当は知るのが怖い。想像しちゃうの。

誰かを好きになったら？告白したら？もし、振られちゃったら…？いつも想像しちゃう。怖い。だから、知したくないふりをするの。

私（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！！
改行に気を付けてみます！（．．．；

今回は、主人公と友達のことです。

よく読み込むと、主人公のことが分かるような、賛同できるような
出来ないような…。個人の感じ方ですね！

私

私

嘘。

それは『私』が自分を守るためにおぼえたもの。最初に言っとくけどね、根暗とかじゃないから。ちゃんと友達いるからね？多くはないけど、親友と呼べる友達がいるからね…？私をそんな目で見るなああ！

「まゝた独り言ってるよ。」

「夕実は天然だからね。仕方ないじゃん。」

「でも本人は自覚なしっていうね！しかもKY線手相に出てるし！！」

「まじで！？」

「ちがうから！天然じゃないから！あと、KYは最近治すように努力してるから！！」

私が反論すると、友達の咲ちゃんと奈緒ちゃんが笑いだす。何故かここでは私、篠田夕実は天然で通っている。ちなみに今は放課後で咲ちゃんの家にお邪魔してます。そこでいろんな方向に話が曲がって、現在進行形の恋の話へ進んだのでございます。

「でもさ、いいよね。夕実ちゃんってさ可愛いし。」

「そうそう。みててこっちが癒される。」

「なななななな、何言ってるの！？眼科いったほうがいいんじゃない！？夕実なんて可愛くないよ！？それなら咲ちゃんや奈緒ちゃんのほうがかわいいって！！」

「いやいや、これだから天然は怖いよ。無自覚なんだから。」

「言つとくけど、クラスの男子ほとんど夕実ちゃん普通に可愛いと思ってるけど？」

「あー！！そうそう！今一番モテてるの夕実ちゃんだよ！？」

「ええ！？」

咲ちゃんと奈緒ちゃんは今どきの女子高生って感じでかつこいももちろん可愛くておしゃれも出来て、可愛さとかっこよさ両方持つてる。スタイルもいいし、男の子にはとてもモテる。私が知る限りでもたくさん告白されてきている。

「そんな褒めないでよ」

「……また夕実、口に出てた？」

「思いつきり。」

もう何を言っているのかわからなくなってきた。私が黙り込むと、待ってましたとばかりに例の話題へ。

「ところで夕実さん。」

「ひゃい!？」

「何その返事!ぶはっ、マジつける!」

「うひゃひゃひゃ!コホン。えとですね、好きな人はできましたか?」

「いません。」

私は即答した。いつもの『笑顔』で。二人いわく、この笑顔はなんか見てるだけで笑顔になるんだって。私にそんな能力はないよ。

「夕実前に言っただじゃん!夕実は誰とも付き合わないっ、て。」

「現役女子高生が恋愛経験をつまずにどうする!青春は一度きりだぞ!中学生でもしてるわ!」

「咲は知らないと思うけど、夕実ね、中学ん時に「夕実は誰とも付き合わない」って言っちゃったの。けど何人かは諦めずに告白したけどね。」

「奈緒、あんた同じ中学でしょ!?なんで撤回しなかったの!?もったないことを……!」

「あーあ。夕実になりたいなあ。」

二人は私のことをいつもうらやましそうにする。でもね、本当は私の方が羨ましいんだ。だって二人は私と全然反対で、私のなりた

い人物そのものなんだもん。

「……夕実の、」

「ん？」

私は二人からどんな、違う。『周り』からどんなイメージを受けてるんだろう……。うまくいつていたら嬉しい。じゃないと、『夕実』が消えちゃう。

「夕実のイメージ？じゃないな。うー…、あ！夕実って、どんな子に見える？」

すると二人は勢いよく答えてくれた。

「もちろんそんなの、
笑顔が可愛くて、」

嘘一つ。醜くて、

「明るくて、」

嘘二つ。めんどくさがり屋で。

「誰にでも優しい！！」

嘘三つ。本当はあまり関わりたくない。

「ありがと！夕実ね二人とも大好き！！」

その後は、たわいもない話で盛り上がった。

みんなが思っている私はずいぶんといい子。でも、そうすれば誰も嫌わない。陰口も言われない。逆に陰口も言わない。人の陰口聞いて安心してる。……醜い。こんな人間が恋愛なんて出来ない。ただでさえ嫌われるのが怖いのに。

「君が好きだよ、なんて言葉、嘘に決まってる。そんな人、いるはずない。」

嘘つきだらけ。嫌われるのも、恋愛するのも怖い。本当の私は何処へ行ったのかな。

私（後書き）

えー、さわやか君と出会ったのはもう少しあとですね・・・（い）

君（前書き）

今回は主人公と爽やか君との対話です。はじめて会ったとき、主人公は爽やか君にたいして持つイメージが分かります。

駄文ですが、温かい目でみてください（――）！！

君

君。

「そろそろ咲くんじゃない？屋上の花。」

「そうだね、今日あたり見に行ってみるよ。」

私は園芸部。屋上と裏庭に植木鉢と花壇を学校から貸し出してもらっている。先輩たちは男女とも三人。一年生は私を入れて四人。ちなみに女子だけ。でも男の先輩も女の先輩もかつこよくてかわいい。校内でよく名前を耳にする。だから園芸部は「美男美女がそろっている部活」と言われている。

「今日はいい天気だな。これだと、カーネーション咲いてるかも。」

カーネーションは私が好きな花。母の日に贈れるとかそういうんじゃないから。ただ単にかわいいし、全体的にパーツと咲いていて、「花」って感じがして好き。前に咲ちゃんにそう言ったら「夕実らしいよ」と言われてしまった。

放課後。まだ五月だけどけっこう夕焼けが綺麗なこの時間帯。屋上の花に夕焼けのオレンジが重なる。特別広いつてわけじゃないけど、このひっそりとした空間にできる何とも言えない風景が好き。いつの間にか私のお気に入りの一つになっていた。

「うん…。風も気持ちいい。やっぱり放課後っていいな…。」

そよかぜが吹いてさわさわと花が揺れる。幻想的。自分だけの空間。誰も入れない、入れさせない。これは私だけのもの。

「咲いてる。先輩に報告しなきゃ。」

咲いているのは赤色が五本。水を手ですくってから優しく花にかける。この作業にも慣れてきた。水をかけ終えてドアに手をかけようとしたとき、ドアの向こう側から階段を上ってくる音がした。私はとっさに給水塔の影に隠れてしまった。

このとき、何故隠れたのかはわからない。そして、その行動に後悔するのに時間はいらなかった。

「中学の時からずっと好きでした！その…、付き合ってください…！…！」

告白きたー！べたなシーンに遭遇した！！でも、本当はこういうの気になってたんだよね。生で告白シーン見れてちょっとうれしいかも。相手の返事を息を殺して待つ。

「……………ごめん。気持ちだけもらっとく。」

「……………！」

女の子は走って行ってしまった。ボタン、とドアの閉まる音がしてから相手の男子生徒は動いた。というよりもその場に座り込んだ。結果、二人だけの空間が出来てしまう。

「…何コレ。どうしょ。ばれないように、そーっと抜ければ…。」

「さつきからなにやってんの？」

「んぎゃー！！！」

驚いて思わず声を発してしまった。背中から声がして、びっくりした。振り向くと告白されていたらしき人物の男子生徒。黒髪に長身。さすが男の子といったところか。制服のYシャツ彼の爽やかさを引き立てている。第一印象がめちゃくちゃいい。きっと性格もいいんだろっなと思うと、私の彼を見る目は相当醜かったと思う。

「なんでもないよ？」

ばれないように笑顔を作る。いつもの私になればこんな危機回避できる。普通に平然を装おえば相手は「そっか」とかそんなふうに軽く流してくれる…

「さっきの、聞いてた？」

……はずだった。なんで聞き返してくるの！？そして私は何て答えればいいのか？

「聞いてないよ？なんのこと？」

「ならいいんだけどさ。」

そついつつ彼は私の隣にくる。あれ？こいつどこかでいたことがある。確か同じクラスの「爽やか君」って呼ばれてる人。

「…篠田さん、おい。」

「にやに！？はっ！てか、なんで私の名前知ってるの！？」

「え、だって同じクラスじゃん。てか今の声面白いね。やっぱり噂の天然ちゃん？」

驚いた。私あんまり人とかかわるのめんどくさくて、クラスの人の名前全員まだ覚えていない。友達の人数は大勢じゃなくていい。だからクラスで知っているのは咲ちゃんくらい。苗字とかぐらいは顔見れば一致する。でも名前で呼び合うような仲ではない。そういうの望んでないし、望まない。きつとクラスでの私のイメージは「明るいけど冷めてる」という中途半端な感じだと思う。

「でも、私あなたの名前知らないし、天然じゃないし！」

「じゃ覚えて。俺は二宮悠。よろしく。」

そういつて手をさしのばして握手を求めてきた。なんかこの人なら私のことちゃんとしてくれる感じがした。でも、明るくて積極的で。そんなところに嫉妬した。だから握手はできなくて、笑顔で「よろしく」と答えた。二宮は握手しなかったことに対して何も怒ってはいなかった。またそれにイラッとした。

「……てか、なんで天然とかいわれてるのかな。分かんないんだけど。」

「え、無自覚？クラスでも話題になってるじゃん。篠田さん天然で女の子らしくて可愛いって。」

「かつかわっ…!？」

「お、おう。どーした？」

「眼科行つてきて!!!」

まさか男子に直接かわいいと言われるとは思わなかった。不意打ちだ。しかもなにその印象。私冷めてるイメージしかなかったけど。

「はははっ！やっぱり天然だ。」

「……、あのさそのイメージって、男子からの？女子からの？」

「両方だけど？」

「ええ!？」

「さつきから驚いてばっかだね。本当だよ？女子からは可愛くて優しくていい子って。でも篠田さん自分から声かけないでしょ？もったないよ。」

「……………」

嫌われていないのは安心した。でも自分から声はかけられない。いつ自分に疲れるかわからない。ほんの一瞬だけ隙を見せたら全部が崩れる。すべて台無し。

「……………できるわけない。」 思わずつぶやいてしまった。止まらない。

「出来るわけない。二宮君は知らないと思うけど、自分が苗字で呼ばれることがどれだけ寂しいのかわからないんだよ。」

おもいきって声をかけてみたりする。でも「篠田さん」って呼ばれると心がぼつかりとあく。呼ばれるたびに。明るく話しかけても同じクラスとは思えないくらいによそよそしくなる。

「二宮君は違つてしょ？」

二宮君は黙ってしまった。そのときどんな表情をしていたのかはわからない。顔を上げて彼を見ることが出来なかったから。今までやってきたことをこれからも続けると決めた。今さらやめることはできないよ。

私は立ち上がって扉の方へ向かう。ああ、折角話しかけてくれたのに。彼は私が屋上から出ていくまで動かなかった。

君は誰に対してもやさしくて、私にないものを持っている。だから私は君のことが 嫌いです。

君（後書き）

なんか話が進むの速かった！

気を付けます…。

君（前書き）

「君」のその後です。二宮君の回想シーンはいります。
今回は二宮君のことです。

短めです！…もはや長編になっているのから心配になってきた。

君。

君。

『二宮君は違うでしょ？』

クラスで友達と話しているときには聞かないようなさびしい声で
そういった。篠田さんと話せてうれしかった。自分では気づいてな
かったみたいだけど、学年で人気がある。

「もっと笑えば可愛いのに……。」

篠田さんに初めて会ったのは中学の時。他校との交流会で篠田さ
んたちが俺たちの学校に来たことがあった。そのときに迷子になった
彼女を見つけたのが俺だった。

「なにしてるんですか？」

「えっ！あと、その……。迷子になっちゃって……。すいませ
ん。」

「いいですよ、この学校広いから。案内するよ。何処に行くの？」

「えっと、花壇…ありますか？花があればいいんですけど。」

「花を見に行くの？花好き？」

そう聞くと篠田さんは満面の笑みで答えてくれた。

「はい！大好きです！！」

その笑顔にやられました。一目ぼれてやつ。俺はたくさん告白とかされてばかりで本気で恋をしたことがなかった。だからこんな気持ちになるのも初めてで、どうしていいのかわからなかった。交流会が終わった後もずっと篠田さんのことが頭から離れなかった。そんなことがあってから一か月後。篠田さんを見かけた。その時に篠田さんは花が好きと即答していた時の笑顔はなかった。考え込むような顔をして寂しそうだった。溜息をついたりして心配になっていた――。

だから同じ高校で同じクラスになれたのはすごくうれしかったんだ。雰囲気とか変わっていなかっただけど、どこか違った。心ここにあらず、というかあれって篠田さん？と別人に感じてしまうほど。さっき俺が声をかけた時の篠田さんの笑顔はなんかいつもと違った。他人に向けるもので、やっぱりまだ俺は親しい仲ではないのだと確信させられてしまう。誰に対しても壁を作っているのだ。

「ライバルも多そうだし…。つーか俺のこと知らなかったんだ。はー。前途多難。さっき俺のことどう思うとか聞いとけばよかった。」

結局なんにも出来ないまま彼女は屋上を出て行ってしまった。給水塔にもたれかかる。篠田さんが育てたはなが風にあおられて踊っている。

「……絶対、気持ちを伝える。」

どれだけ時間がかかってもいい。

君は可愛くて女の子らしくて。俺とは違って努力家で。だから俺は君のことが 好きです。

きっかけ（前書き）

体育祭編に入りたいです。

そして話のスピードが速くなったり遅くなったりしますねえ…。

きっかけ

きっかけ。

「…………あのさ、二宮君って噂の爽やか君だよね？」

「そうだよ？あれ？もしかして興味あるの！？」

「そんなんじゃないけど…。」

昨日の放課後に何があったかなんて話せない。二宮君に対して嫌な感情を持ったことなんてなおさら。だって彼は学校一爽やかかって通っている噂の少年なのだ。そんな人と二人きりでいたなんて、まして告白シーンで相手がふられちゃったところを見ちゃったなんていえるはずがない。

「何か隠してるでしょ。夕実って嘘つくの下手だからな。すぐに顔に出るし。」

「だっ、だってそれは仕方ないじゃん！！」

「てことは隠し事あるんだ。」

「！！ えっと…。」

じりじりと迫ってくる咲ちゃんの顔を見れずに目線を泳がせる。すると男子に囲まれて話している二宮君が目に入る。反らしたいのに反らせないでいると、目があつてしまった。私は昨日の今日のとて、ばつが悪そうな顔をしてすぐにそっぽを向く。悪い印象を植え付けても、私は何にも問題はない。だって、『嫌い』と分かったんだから。

「……………。実は、昨日…放課後に二宮君と話したんだけど…………、」
「うっそ！まじで！？何話たの！？」

「話したつていうか、夕実の印象悪くしただけ。夕実なんか二宮君苦手かも…………。」

「夕実にも苦手な人っているんだね。ちょっと意外かも。でも何で二宮なの？あいつ噂通り爽やかでいいやつじゃん。告白も絶えないらしいし。」

「それだけじゃないわよ！！！」

そういつて話に割り込んできたのは、由比真美（ゆいまみ）。彼女はクラスの学級新聞作成担当でいろんなクラスや学年に聞き込みをしているらしい。そのため、二宮君の情報をたくさん知っているみたいなのだ。

「二宮悠。爽やかで誰に対しても分け隔てなく接し、性格も良し。友達づきあいも良好で部活でも先輩に信頼されている。この学校で彼を嫌いになる人はそうそういないわね。」

それだけ言つと満足そうにその場を立ち去ってしまう。

「…すごいね。」とポツリ言う私。

「なにが？」

「二宮君。だって第一印象がよくて、性格もよくて…、」

ずるい。私はその三文字を口に出しそうになった。視線は二宮君へ。彼と彼の周りの言葉が遠くで聞こえる。ああ、拒絶しているのだと分かる。

「ほんと。二宮が羨ましくなっちゃうよ。」

「咲ちゃんでもそう思う？」

「そりゃそうよ。だって相手にいい印象しか与えないじゃん。嫌な気分にならないじゃない。」

「そうだよね…。」

嫌われることもないんだろうしね、と言った咲ちゃんの言葉に私は心がもやもやした。

そんな風に思った十分休みのこと。

「じゃ、今日は体育祭に向けて種目決めするぞ。」

一時間目は担任の体育…のはずだった。担任、あだ名が『くうちやん』とよばれる男子教員は熱血で、負けず嫌い。でも熱くなっているのはそれだけじゃないだろう。

「せんせーい。もしかしてまたかけてるんですかー。」

「ふっふっふ。聞いて驚くなよ！今回はなんと！豪華寿司だー！」

（（（　くだらねえ。　）））

クラス中の心の声が一致した瞬間であった。

「んじゃ、運動部入ってるやつらはソフトかバスケかサッカーな。それ以外はまあ、適当でいいんじゃない？」

何で疑問形なんですか先生。そして適当でいいんですか先生！？

この学校の体育祭はクラスごと対決する。しかも学年関係なしに
対戦が組まれていくから何処と当たるのかわからない。一年が三年
と当たる可能性があるということだ。

「夕実はなにやりたい？夕実に合わせるけど。」

「ほんと？じゃあね…サッカーがいいな。」

「わかった。名前書いとくね。」

「あ、夕実もいく。」

黒板に名前を書いて席に着く。一番楽そうなものを選んだつもり。
安心して黒板をふと見ると、ある名前にくぎ付けになった。

『二宮悠』

サッカーの男子のところに名前。あいつとおなじなのか、と気分
が沈む。私が二宮君の名前に気付いたように、二宮君も私の名前に
気付いたのかこっちにやってきた。そして隣の席に座って話しかけ
てきた。

「よっ、篠田もサッカーなんだ。」

「そっだよ？なんで？」

「いや、なんか運動とかしないイメージあったから以外。楽なソ

フトに行くのかと思ってた。」

「だってサッカーしたいんだもん。」

噓。 サッカーが一番いい。だってゴールキーパーっていう誰ともコンタクトを取らなくていい役があるじゃん。どうせどの競技もチームワークが大切だ、とかで応援しあうんだろうけど、私の名前呼ぶほどお仲がいいってわけじゃないし。それにみんなのイメージ近寄りがたいってことになってるじゃん。

「ま、お互い頑張ろうな。」

「そうだね！」

めんどくさい。なんで二宮君が頑張るからって私も頑張らなきゃいけないの。と、ちよつと嫌な風に思ってみる。そうやって心の中で呟いて外側で反対のことをする。そうしないといろいろもたない。

「夕実、任せて！あたしがおもいつきりゴール決めるからね！」

「咲ちゃんのシュート、ちゃんと見るから！！」

周囲からは楽しそうに見える会話も、私と咲ちゃんしか味わうことが出来なかった。

なんであの時、わたしは選択をかえなかったんだろう。もう一度戻って消して、違うところにすればよかった。そうすればあんな気持ちに気付くこともなかったし、今まで味わいたくなかった気持ちも味わうことになってしまった。気付いたら戻れない。そう、分かっていたはずなのに。認めたくない、と拒絶したがる私がいる。

きっかけ（後書き）

今回の主人公種目の選択「主人公の気持ちの変化　につながると考えてくれれば幸いです。

爽やか君と同じ種目になったのになんで変えなかったのか…というところです。

図書室

図書室。

「……だるい。」

授業ってつまらないよね。誰でもそう思うと私は思う。自慢じゃないが、嫌いな授業は図書室でよくサボっていたりしちゃう。高校なんて、赤点とらなかつたらいいんだし。まだ一年生だしね。ここだけの話、部活の先輩は一年のうちにたくさん遊んどけっていう。二年は課題も増えるし、いろいろ大変なんだって。

「……………。暇だ。」

さばりに来るのはいいけど、何もすることがないのが欠点。いままでは面白そうな本読み漁っていたけどね。

「息がつまりそう。」

呼吸がまともにできないのに我慢してあの小さな箱に閉じこもるのは疲れた。我慢するのは得意なのに。

物思いにふけっていると、ドアの開く音がした。先生かと思つてバツと振り返る。

「うわっ。びっくりした。……なにやってんのこんなところで。」

二宮君。何でこんなところに居るのかな。先生じゃなかったことに安心したけど、見つかったのがこの人っていうのがなにか複雑。

「見て分かんないの？さぼってるんだよ。」

「へへ。以外。篠田ってしかつりしたイメージだったからさぼりとかしないと思ってた。てゆーか、さぼる勇気が俺にはないよ。」

「ね、それってほめてるの？呆れてるの？」

「ん？俺はほめてるつもりだけど。」

どっこいしょ、と隣に座る。戻んなくていいの？教室、と聞くと「ちよつと楽しそう」といって目を輝かせた。しまいには、

「俺もさぼっちゃおうかな。」

という始末。私だけならいろんな言い訳ができる。でも二宮君には出来なさそう。こっちまでさぼってるのばれたくないんだけど。

「ばれたら大変じゃない？」

「あゝ、平気平気。だってオレ、くうちゃんのちよつとした昔馴染みでさ。ほら、ああいう性格だから自分に面倒事が降りかからな

いように裏でいろいろやってくれるからさ。」

「そーなんだ…。」

やっぱりあれを先生なんて呼べないな。ああ、でも見逃してくれるのはいいな。それ。

「……………篠田はさ、いつもこうやってるの？」

「違うよ。どうしても我慢できないときだけ逃げるの。」

「逃げる？」

「そうだよ。慣れちゃったから仕方ないの。……………って、だめだつてこと分かってるんだけどね。」

そう。自分は分かってる、一番よく知ってる。このままじゃいけないって。でもほかにどうしようもないから仕方ないでしょ。

「……………あのさ、前に気持ちわかんないって言われたじゃん？」

「……………うん。」

「あの後考えたんだけど、やっぱりわかんなくてさ。だから、篠田が教えてよ。」

「え？」

「篠田の気持ち、聞かせて。」

まさかそんなことを言われるとは思っていなかったから拍子抜けしちゃう。

「私の話聞いてもつまんないよ。話すの上手じゃないし。」

「前聞いておもってただけ、篠田って感傷的？というか寂しいね。」

「寂しい……？」

「ほら、考え方っていうかさ、暗い方にいつてんのかな。」

「……………」

全部が全部あたってるわけじゃないけど、指摘されると分かり切ってるから腹が立つ。どうして余計なところに首突っ込んでくるのかな。そういうところは流してくれればいいのにさ。

「…………。いいよ、話しても。ただなにもいわないでよ。自分が一番わかってるんだから。」

「分かった。」

「人と話すのがめんどくさいです。」

「…………は？」

「それから、夕実みたいな生き方してたら友達もなかなかできないよ。作るつもりもないけど。グループとか大人数とかちよつと苦手。最初から嫌な思いないように勘違いしないように、他人とは微妙な距離を置く。距離を置きすぎちゃうと逆効果だから大変なんだよ。」

「そ、なんだ。」

「ああ、これ一番重要。自分の気持ちは抑えなきゃダメ。好きなことは好きと言ってもいいけど、嫌なことがあっても我慢しなきゃダメ。相手に不快になるようなことしたら我慢してる意味がない。これも逆効果。簡単に言えば、自分より他人優先ってことか。」

「……。」

黙ってしまった。途中で笑い飛ばしてくれないから空気が重くなる。私としては当たり前のことを言っていたただだからそんなに深く考えなくてよかった。ただ聞いてくれるだけだと思ってた。「そうなんだ」程度に流すのかと思ったのに。

私が第一声を待つ。

「……あの…？どうしたの？」

「篠田ってさ……、」

「それが普通だと思ってるの？」
「え？」

予想もしなかった第一声でした。まさか逆に質問されるん何て…。

答えに困ってしまった私は数秒間、言葉が喉まで来ているのに、声にすることはできなかった。

図書室（後書き）

微妙なところになってしまいました…。

無防備すぎだろ！（前書き）

え〜と、純粋な高校生男子の目線ですね。

エロくないですよ？

むしろ後半ちよい、からかわれて可愛そうなくらいですね…。

…… あっ、ネタバレしちゃった（笑）

無防備すぎだろ！

本日晴天なり。絶好の体育祭日和です。しかしながら夕実は熱いの
が苦手なのれす…。

「夕実、あんた大丈夫？」

「ひゃい…。咲ちゃん、平気れすよ？」

「れろれろじゃん！」

「れろれ…？」

夕実はしゃがみこんでいるため、咲と話すには上目遣いのように
なる。それがどうも無意識の行動だったらしく、咲と夕実を心配し
てちらちら見ていた奴等は顔を赤く染めた。

「ちょ、ゆ、夕実！あんた…！」

「？ どつたの？」

「どつたの？じゃないよ！あんたいまエロいわ…！」

「はあああ！？」

エロい。なんて言葉、夕実にはもったいないんだけど！てゆうか
今頭くらくらする…。まだ始まってないのに保健室に行かなきゃい
けなくなるの？それはちよつと嫌だな。

「うゝ。」

「どーすんのさ。早めに治しちゃったほうがいいと思うけどね。」

「……………そーする。」

仕方がないから保健室に行くことになってしまった。保健室にはまさかこんな早くに生徒が来るなんて思っていなかったらしく、先生は不在。私は狭いところが好きだから、咲ちゃんは五つあるベットのうちの一番奥に連れて行ってくれた。

「ここでじつとしててね。また少ししたら来るから。」

「ん…ありがとう。」

お大事に、と咲ちゃんが声をかけてくれたのと、その後に続いて扉が閉まる音がしてから私は深い眠りについた。

「しつれーしまゝす。」

やつちまった。女子がふざけて俺のことを突き飛ばすから足をすりむいて結構大量の血が流れてしまった。さつき小耳にはさんだ女子の話によると、今はまだ保健室に先生がいないらしい。もうすぐ

体育祭が始まるし、クラスの大半が競技に出るから自分でやる、と言ってきた。

「つか、手当できないんだけど…。とりあえず、ばんそーこー…。」

棚にある医療箱に手を伸ばす。すると、一番奥のベッドが視界に入った。カーテンが閉まっているから誰がいるのだろう。結構大きな声で独り言を言っていた俺は反省した。そのまま静かに机に向かおうとしたとき、片方の手がだらりと垂れさがるのが見えた。

「…。体勢崩したのか？」

手は細く女子であることが分かった。触るのはやっぱり少し悩んだが、意を決してカーテンをめくった。

「……え…？」

そこに寝ていたのは、篠田だった。いつもの篠田は天然でかわいらしい感じだが、今の篠田は危ない。おもわず顔が赤くなるのが分かった。なぜなら、スカートが少しめくれている生足があらわになっている。しかも熱中症か顔が赤く熱っている。汗で体のラインにぴったりとまとわりつくシャツと、乱れた髪が色気をダダ漏れにし

ていた。

「ちょーやっぱ!」

カーテンを閉めなおす。呼吸がああああ!!一応俺も高校生です、そこそこ理解お願いしますね。色気ダダ漏れ+無防備。こんな最強セツトありえねえ!!

「…っ篠田、えろ…。」

そんなことを1人呟いていると、突然扉があいた。

「夕実!ぐあいどー??」

「ぶーーーーーーっ!!」

咄嗟に床に突っ伏す。人が来るなんて思っていなかったから油断していた。まさか生徒が来るなんて!いや、待てよ。冷静になれ俺。ここは保健室だ。しかもいまは体育祭の真っ最中じゃないか。怪我をするのは当たり前っっちゃあ当たり前のこと。でも始まったばかりだし~~~~~!!!

「二宮…?」

俺がうおおおお！と悶絶しているところを見て入ってきたやつが俺の名前を呼ぶ。落ち着いてみると何時も篠田と一緒にいる『近藤咲』がいた。めちゃくちゃ不審な目で俺を見る。そりゃそうか。

「あんたこんなところで何やってんの？」

「あ、いや別に……。」

「ふ……ん。あつそ………」

と、近藤が言葉を詰まらせた。動きも止まって、視線がこちらを向いている。どーしたのかと目線を追えば、やってしまった。閉まっていたはずのカーテンは開いていて、篠田はあらぬ姿。俺のせいではないが、周りから見たら怪しい光景だろう。疑いたくもなる。しかも俺はさっきまで悶絶していたのだから。

「あ、あんた……っ！まさか夕実を、お、おお、お……！！！」

「ちょ、ばっ！おちつけ……！！！」

「ぎゃーっ！！変態痴漢……！よるな……！！！」

「わ……！！！！声がでけえ……！！！！頼むからおちつけ……！！！！！」

近藤がご乱心だ。疑いをかけられたことよりも大声で痴漢呼ばわりされたことが心配になった。噂とは恐ろしいものだよ、諸君。あつちゅーまに広がっていくでつち上げの話。自分の耳に入るころには物凄いことになっているだろう。今回のことだときつと『篠田を二宮が襲った』、みたいな感じになるんだろう……！！？

「あんたが夕実のこと好きだったのはうすうす気づいていたけどまさかここまでするなんて!!」

「だから違うって!!俺は篠田の…!」

「夕実の何よ!!!」

「いや、その…。」

「ああ!!絶対今やらしいこと考えてたでしょ!!ていうか好きなことは否定しないんだあ?」

「考えてねえし!!!!それは、その…。」

……。なんだこいつ。話の変わり方が急すぎる。しかもなんかにやにやしてるし。ばれちまったし。あゝあ。なんで俺隠し事とか下手なんだろう。

二宮悠。人生で物凄く演技力を高めたいと思った瞬間でした。

無防備すぎだろ！（後書き）

一回ばれたところで切りますね。

ばれたというか咲ちゃんは気付いていた、ということですね。

演技力、鍛えさせましょうかね、彼に（*^|^*）

親友の優しさ（前書き）

保健室あの後、の親友の独白です。

色々と主人公ちゃんのこと分かってるようでした。

理解してくれる友達っていいですね。

優しい嘘が、垣間見えますよ！

親友の優しさ

「で、あんたはなにもしていないと？」
「最初っからそういつてんじゃない。」

女に頭が上がらない俺ってどうよ。

「つーか、俺そんな風に見えたんだ。」
「何言つてんの。男なんてみんな同じでしょーが！」
「なっ！！ちげーし！！俺は断じてちげえ！！！」

正座させられていたことを忘れて立ち上がり思いっきり反論した。
それがまずかった、いろいろと。

「つ~~~~~~~~つ！！！」

足がしびれていた。あたりまえか。それから…

「へ〜？なんか全力なところがあやしいな〜」

逆効果で余計に怪しまれた。でもさ、おれにも言い訳ぐらいさせてくれよ。今どきの高校生何てこんなもんだろ？しかも好きな女子ならなおさらだし！

俺がふて腐っているとベットのほうから眠たそうな声がした。篠田起きたらしい。近藤が介抱している。それが気持ちいいのか、めちゃくちゃ幸せそうな顔してる。

やべ・・・めっちゃかわいい。

と、思ってしまうのは馬鹿だろうか。あゝあ、こんな話津田にしたら笑われんのかな…。

「いや。あいつも結構一途すぎだし…。」

「なに独りごとやってんの。」

「うわぁー!!」

篠田が怪し目でみてる!!なんか勘違いされてねえ…？

「いや、これはその…。深い意味はないからな!…あおっと!俺そろそろ出番だから行くわ!じゃな!」

「あ、そう。」

その後俺は全速力で廊下を走ってグラウンドに行きましたとも。

「あゝあ。あいつがねえ…。」

はい、こんにちわみなさん。私は近藤咲ですよ！めちゃくちゃ可愛
いあたしの友達、夕実ちゃんはひそかにモテています！！うすう
す気づいてはいたけど、まさか二宮が本気で好きになるなんて。

「はあゝあ。恋なんて知らない夕実が学校一のモテ男に好かれる
なんてなあゝ」

正直女のあたしでさえも愛しく感じちゃうのよ。なんかみてる
とほおっておけないというかなんというか。危ない、っていうのかな。

「あの子、たまに変わるからな…。」

無理をしているのもわかる。それを必死に隠そうとしているの
もわかる。だからこっちは何も気づかないふりをしてやるんだ。

「必死じゃないね…。きつと、無意識で…。」

そう思うと悲しくなってくる。本音を言わないし、いつも人に譲

ってばっかり。自分の意見は後回しで他人優先。人との付き合いもめんどくさい様子だし、友達も話す子はいるけど無意識に壁を作ってるのが分かる。

「……ほんと、無意識とか無自覚って怖い。」

夕実のことは、絶対に一人にしないさせない。あの子が壊れないように、支えてやるんだ。

「もしも本当に二宮が諦めないんだったら……全力で応援してやる。きつとあの女が邪魔してくるだろうけど。」

あの女。そう、あたしが大っ嫌いなあいつ。あたしの青春をぶち壊したやつ。

「夕実は変わり始めてる。本当に少しずつだけど。いろいろ考え始めてる。それを邪魔させたりはしない。」

夕実の平穏は、あたしが守って見せる。

「覚悟してよね……？」 『土屋瑞樹』。

近藤咲。 人生初の一大決心です。

親友の優しさ（後書き）

津田君やら土屋瑞樹やら、新キャラでます！

土屋君は二宮の友達で土屋はいろいろと……。とにかく濃いキャラです！二人とも！これからの話に重要な人物ですね！！

逃げた。(前書き)

シリアス……？物語の流れが速いかもです。

うゝ(+ | +)

逃げた。

「お願いだから、ほっておいて……!!」

思わず口に出してしまった。ほんとにこんなこと言っつもりじゃなかったのに。ああ、ほらね。いつも自分のことしか考えられない私。だから嫌われちゃったのかな。

だから愛されなかったのかな……？

「ねえねえ、二宮あー。今日遊ぼうよ」

「わり。今日はムリ。つか、今日も無理。」

「のりわるいなあー、ほんと。でも二宮だから許してあげるう」

午前の種目がすべて終わってランチタイム。

隣の席で繰り広げられる甘い会話。たぶんリップグロスたっぷりでゆるふわカールのちょいギャルの女生徒は、誘っている相手にきつと本気。でも誘われている当の本人は、交流を深めたいから誘っ

ているんだレベルだと考えてるだろう。ある意味こいつも天然だ。
こんなやつに夕実を任せられるのかな？保健室事件以来、心配に
なってきた。

「ね、あんたさ夕実のこと好きなんでしょ？」

「はっ！？い、いきなりなんだよ！」

なに動揺してんだか。バレバレだし。

「動揺しすぎ。あんたが何で隠そうとしてんのかよくわかんない
んだけど。」

「……………」

「何か事情があるのか知らないけど、まあ焦らずに頑張つてよね。」

「……………隠してるつもりはないんだけどさ……。なんか、心配っつー
か……。」

そっいつて言葉を濁す。どういうことなのか問いただと自分で
もよくわかんないらしい。ただなんとなく篠田は無理をしてんじや
ないのかって思っている。

「実はさ、俺篠田に一目ぼれだったんだよね。」

「えっ！？いつ！？」

「中学ん時。なんか交流会みたいなのがあつた時にたまたま会っ
て。」

交流会。夕実が迷子になったときの……ん？さてよ、じゃああの

時の男子生徒って！

「あんだったの!？」

「そう。んで、そんときにさ『花壇ありますか?』的なことを言われて。」

「夕実は花が好きだったから...。」

「その時の笑顔がめちゃうくちゃ可愛かった。」

「.....。」

えーと、つまりそれは...

「のろけ...?」

「.....。」

急に黙り込んでそっぽを向いてしまった。なんだこいつ。めっちゃピュアじゃん!!さすが学年一もてる男!!

「.....でもま、あんたにならきつと夕実も素直になってくれると思う。」

「なにが?」

「あんたって鈍いんだか鋭いんだかよくわかんないわね。」

「??.」

頭に?マークを浮かべる。夕実が『嘘』をついてることに気付いているわけではなさそうだ。ただ、中学の時よりも『何か』が違うことに気付いたのだろう。それだけでも気付いてあげられたことは、夕実にとって救いになる。

「あんたが感じてるとおり、夕実が隠してる。無理してる。それを何とかしてあげられるのはあんたしかいないのかもしれない。素直で真っ直ぐであの子のことを思っているあんたしか。」

「俺、今褒められてんの？」

「そうそう。頑張んな。」

深くは話せないけど、こいつには知っていてほしかった。夕実が怖がっているものを。無意識で感じていることを。

それから間もなくして夕実が保健室から戻ってきて二宮がめちゃくちや慌てていた。

「は……。」

体育祭はほとんど休んじやつたし、咲ちゃんともなかなか会えなかったし。ほんとに憂鬱。でも午後の競技もあるんだし、お昼はしっかり食べなくちゃね！

「あれ…？あそこにいるのって…。」

校舎の角に人が入っていくのが見えた。そこまで仲良くはないの
について追ってしまった。そして、

「あれ？篠田…？」

気付いた時にはすでに遅し。後悔が押し寄せてきた。

「なにやってんの、こんなところで。」

「え？いや、その、意味は、ないけど。」

「へー。」

「そ、それより！二宮君こそここでなにやってんの？」

声が裏返ってしまった。緊張してしまった。屋上で話したときは
冷静で落ち着いていたから緊張はしなかったけど、やっぱり男の子
だとまだ無理。ただでさえ人と話すのが苦手なのに！！

「俺？俺は、ちよつとね。」

「？」

二宮君が背中中で必死に何かを隠そうとしている。その『何か』が
気になって、覗き込んでみた。そしたら「うわあああ！」と叫ば
れてしまった。

「……え？　ねこ？」

そう。二宮君の後ろには子猫が二匹いた。まだニーニー鳴いてる
から幼いのだろう。

「うわああ。篠田に見られるとか超最悪…。俺死にたい。」

「え、ど、どしたの？」

「だって…。」

「男が猫好きとか変じゃねえ？」

「……ぷつ。」

笑ってしまった。そんなことを考えていることが以外で、つい。

二宮君がいることを忘れて私は笑った。

「……………笑った。」

二宮君がそう口にしたのを聞いて私の笑いは止まった。笑ったことがそんなにおかしかったのか、失礼だったのか。怒っているのだろうか？

「え？なにか、変だった…？」

「いや……。篠田が笑ったとこ、初めて見た。」

しまった。気を抜いていた。相手に隙を見せるなんて。これじゃ今までの苦勞が台無し。絶対引いてるよ。キャラが違っつて。でも次に聞いたのは思いがけない言葉だった。

「笑った方が可愛いね。」

「え…？」

思わず聞き返してしまった。

「やっぱさ、むりしてたんじゃない？篠田。いつもなんか愛想笑
いっぽいし…？」

なに、それ。なにそれ。私の何が分かるの。

「なに、ソレ。勝手なことばかり言わないでよ。二宮君なら平
気だっと思ってたのに。」

気付かれた？違う。憶測で言われただけ。嬉しいような、さびし
いような。ただし怒りが込み上げてくるのはなんでだろう…？

「え？…いや、無理はよくいとおもって…。」

「だから、なんでそんなこと言うの！？」

「篠田が心配で…。」

心配？しん、ぱい。

なぜかその単語を耳にした途端、私の口から逃げるための言葉が
出てしまった。

「お願いだから、ほっというて…！」

ちゃんと、向き合わなくちゃいけないと分かっているけど、ただ心

配してくれていたただだと分かっている、素直になれない私がいる。

本当は、気付いてくれて嬉しかったんだよ。でも、『嘘』という名の素直になれない行動で、私はまた逃げて、心を押し殺してしまった。

それも、自分では気づかないうちに。

逃げた。
(後書き)

なんだかこれから主人公ちゃんのトラウマ、というのでしょうか。
分かってくるかもしれないですね。わくわく。

次回は、二宮君の親友、津田君がでてきますよ。たぶん。

親友の恋愛事情（前書き）

津田、二宮君会話どうえゝす

親友の恋愛事情

やってしまった。近藤にあれだけ強く言われていたのにもかかわらず、篠田を追いつめてしまった。正直今でも篠田が何を抱えているのか、無理しているのかはわかんねえ。だからこそ、知りたい。知って俺に何かできるなら何かしたいと考えてしまふ。あいつを思っているからこそ、こんな風に考えてしまふのだろうか…？

「はー。近藤にしめられるな……。」

隣ではニーニー鳴いている猫がいる。自然と口元が緩んで微笑んでしまふのは何故だろう。恐ろしき猫の魔力……！！

「……そーいや、篠田って猫になんとかよく似てるよな。」

「……そっか？」

「え？」

「え？」

思わぬ返答に驚いて後ろを振り返るとジャージを着崩してズボンのポケットに手をつ突っ込んで歩いてくる津田がいた。『津田健吾』は俺の中学ん時からの親友。茶髪でチャラそうに見えるけどけっこう一途。いろいろ俺の相談にも乗ってもらっている。あゝ、あと俺

の「わがまま」にも付き合ってくれるいい奴。

「なんだお前か。」

「オレで悪かったな。つか、篠田ちゃんとすれ違ったけど、なにかあった？」

「あゝ、まあ。」

「あゝあ。どーすんだよ。」

「どーするっていわれてもな……。」

俺は篠田を心配して無理するなって言っただけだし、いまいち篠田が何を怖がっているのかわかんないんだよね。

「心配なのはわかるけど、空気感じろよ空気を。」

「なんかやばいな、とは感じたけどさ。あゝあゝー分かんないかなこの気持。」

「どの気持ち？」

「だからさ。俺は違うけど篠田にとって俺はまだ知り合いにもなっていないわけじゃん。」

「そーだね。」

……そこはウソでもいいから『そんなことなくね？同じクラスだし？』くらいは言っただけだったよ津田君？オブラートに包んでほしいな

「……てことは俺は篠田のことを何も知らないわけよ。」

「まあ、そーだな。」

「好きなこのことを知りたいと思う俺はおかしいか？」

「おかしくはないけどさ。」

「だろ？」

好きだからこそ、相手のことが気になる。知りたいと思う。でも深追いはいけない。そんなこと自分がよく知っていたはずなのに。

「あーあ。やっちまった……。」

「気持ちは分からなくはない。けど焦りは禁物だ。」

「わーってるって。」

「俺を見るよ。いつもお前にアドバイスとかしてきたけどさ、俺が一番報われてなくね？」

「だってお前見た目チャライし、女づきあいひどくね？」

これでも直ってきた、と本人は言っているがいまだにあんましなおっていない気がする。放課後には女の子連れてカラオケやファミレスに入り浸るし、いろんなうわさが絶えない。それでも人気があるのはこいつの魅力と考えていいのかもしれない。なんだかんだで女子の扱いは慣れているから。

「男の俺でも感心するわ。」

「そりゃどーも。けど誰のおかげで屋上で話せたと思ってんの？」

「ありあとーございあしたー。」

「…ま、それはおいといて。聞けよ俺の話。」

「で、結局どーなの。近藤とは。」

そう。こいつが好きなのは近藤なのである。こいつと近藤は幼馴染で両親とも仲がいい。

「あいつに俺誤解されたまんまなんだけど。好きな奴いるって。」

「ありや。それはきついわ。」

「しかも特定の彼女は作らない、ってことになってるらしいし。」

「お前が?」

「そう、俺が。」

「なんじゃそりや。勝手な噂だろ?」

「もちろん彼女が欲しくないっていったら嘘になるけど、あいつしか考えられねえんだわ。」

「……。」

「俺に寄ってくるのはさ、自分着飾った奴だけなんだわ。俺自身をみてくんねえ。自分のことばっかな自己中だけだ。でもあいつはまっすぐに向かってくんだよ。」

少し、こいつを羨ましいと思った。それと同時にさびしいな、とも思った。一途すぎる想いはきつとこいつを苦しめる。届かせたくても届かない。こいつはいつも寄ってくるばっかだったから自分

から寄り添うことを知らない。ずっと待つばかり。甘えることを、知らない。

「……だからちょっと篠田ちゃんの気持ちわかるよ。素直になるのが怖いって。愛されないってことが。」

津田の言葉が胸に刺さった。俺が篠田を全く知らないって言われているのが分かったから。

「だから、これから知っていけばいい。焦らずゆっくりと。俺も頑張るし？」

「……だ、な。」

やっぱり、津田はかこええ、とおもってしまった俺…。

「ちよっと！早くしてよ！次の競技はじまっちゃうんだけど！！」

ちよっと怒り気味の口調で近藤が走ってきた。噂をすれば何とやら。

「わりーわりー。今から行く。」

「早くしてよね。」

「よう睨。久しぶり。」

「あんた、まだ生きてたの？とつくに女共に刺されて死んだのか
と思ったわ。」

「ひどくね？それ。」

「そうかしら。でもはいとこやめないとそのうち自分が虚しく
なってくるわよ。」

「でもやめらんねーんだわ。」

「あ・っ・そ！」

女の子はみんな可愛いからさ、そうですかそうですか、と交互
に言い合って並んで歩く二人。気持ちを分かってもらえないことが
どんあことか、身をもって知った。

初めての…！？（前書き）

はい、夕実ちゃん襲われる〜（笑）

初めての…！？

あのと、二宮君とは話していない。

結局体育祭は私たちが勝った。いい思い出になったし何より楽しかった。けどやっぱりあのことは心にひっかかったまま。廊下ですれ違う時や、同じクラスだから顔もよく合わせちゃうし。二宮君が私に話しかけてくれようとはするんだけどきまづくなってどうしても避けちゃう。

「どうしよう。。」

せつかく気遣ってくれてるのに私がこんなんでーすんのさ！

「し～のだちゃん」

「はあ。。」

「おい？」

やっぱり頑張って話しかけてみようかな…。

「こつち向かないとk i s s しちゃうぞ」

と、聞こえると同時に頬に暖かい感触とぬくもりが伝わった。少し驚いて肩が跳ねちゃった。…ん？待って。なんで暖かいの？ていうか、なんか撫でられてる気もする…。あれ…？今日ってこんなに廊下暗かったっけ…？

手が添えられてることに気づき、その手を視線で追うと目の前には顔が……、

！！！！！！……？？？？

「にやつ！？」

「お、やっと気づいた。」

「な、な、ななな、なんですかっ！？」

「いいねその反応、初々しくて」

「は、話を聞いてくださいっ！！」

おしかつたな、と残念そうに顔を手で覆う男子生徒。全然おしくありません。

「やっぱり可愛いね、篠田ちゃん。反応も面白かったし？」

「…からかわないでください。」

「俺は素直に思ったことを口に出しただけです。…てかさタメじやん？ 敬語やめよーぜ。」

「いや…。知らない人にそれはちょっと…。」

だんだん距離が会話のたびに縮まっていくのは何故だろう。ちょっとずつ下がってはいるんだけどこのままいくと背中が壁に当たっちゃうんだけど。

「あの、その…。ちょっと、離れませんか…？」

「ん？ なんで？」

「何でって…。ち、近いですっ！」

「平気平気。すぐ慣れるって。」

平気なのはあなただけです！って叫んでやりたかった。さすがにそこまで勇気がない。悩んでいるうちにもうアウト。

「ほら、ね？」

背中に壁が当たって逃げ場を失った。視線が合って心臓を鷲掴みにされたような感覚が襲う。ずらしたいけどずらせない。相手は微笑を浮かべているし。

やっこの思いで視線をずらしてその場を立ち去ろうとしたら男の子の左手が伸びてきた。

「…っ。」

「これで逃げられないよね…。」

私の左隣には柱。右隣りには男の子の右手。もうどうすることも出来なくてただうつむくしかできなかった。すると頭の上から言葉が降ってくる。

「そんなに警戒しなくてもいいのに。ただ篠田ちゃんと話があったただけなのになあ。」

そんなこと耳元でささやく必要がないと思います！確信犯なのか知らないけどあなたと私の距離も縮まってませんか！？

「あ……、あ、の…っ」

「あ、やっとしゃべった。可愛い。もしかなくてもこういうシチュ初めて？」

「——っ！！」

確信犯確定決定だー！！！！

「そっか。…じゃあ、篠田ちゃんの「初めて」、俺が貰っちゃうね。」

そう言って顎を右手で持ち上げられて上を向かされる。無理やりに視線を合わせられる。

……………視線は合わなかった。その代わりに薄く開いた男子生徒の唇が視線に留まる。

（え、ちょっとなんで半開き！？ 待ってよ！！ 今の流れで何で「じゃあ」になるのかよくわかんないし！！）

もうだめかと思った時、遠くから走ってくる足音が聞こえた。

「おい！！！！ なにやってんだよ、津田！！！！」

その人は、私が一番逢いたくない人で、一番逢いたかった人でした。

初めての…！？（後書き）

展開はやっ！！

体育祭終わりました。次です、次。

日常編から、進展してく感じですが、はい。

あ、津田君は咲ちゃん一筋ですからね？（笑）

気付いた、心。(前書き)

見て見ぬふりは、ながくは続かなかった。

気付いた、心。

津田、という人らしい。目の前の男の子は「あちゃゝバッドタイミング」なんて言って苦笑いしている。

「お前はなんでそうさあ……。」

「ごめんごめん。篠田ちゃんいたからつい、ね。」

「つい、じゃねえよ!!。」

津田君と廊下の向こう側から走ってきた人、もとい二宮君は言いあらそっている。助けてもらったのはありがたかったけど、きまづい。このあとどうしようか迷っていると二人の会話が終わった。

「マジごめんね、篠田ちゃん。悪気はなかった……と言えば嘘になるけど、可愛い女の子見るとつい癖でねえ。許してね。」

「……はあ。」

「篠田！許さなくていいからな！こんなやつ!!。」

「こんなやつとか酷いよ、にのみー。僕たち友達でしょ。」

「うへえ。よるなきしよい!!。」

津田君は二宮君に抱きついて離れようとしない。そんな状況をみたからというわけじゃないけど、この二人はすごく仲がよさそう。

二宮君の話し方も、クラスに居る時とは違って自然体だ。津田君には悪いかもしれないけど、変な気をつかっていないと思う。

「…二人とも、仲がいいんだね。」

なんて思ったことが口から出てしまった。

「ふふっ。」

なんか空気が和んだのを感じて思わず笑みをこぼす。はっ、とわれにかえって二人を見てももう遅い。ぽかーんとして私を見ている。

「あの、えと。い、今のはちがくて、」

「「…何が？」」

「だから、別におかしくて笑ったとかじゃなくて、その、」

「「何で？」」

二人の声が重なって返答してくる。だから余計にあせる。だんだん私の顔も下にうつむいてくるし、ここまでくると上げようにもあげられないし…！！

「だ、だから！二人みterると安心するなーというか、和むなーと
いうか…！！」

最後の方は自分で言っていて恥ずかしくなってきたしまい、語尾がもによもによ言ってしまった。男の子二人を見ていて和むってなんなの私!!

……なんでふたりとも何も言わないの？

結構長い沈黙が続いて、最初に聞こえたのは言葉ではなく「笑い」だった。

「「ぷっ」

「・・・へ？」

「あはははっははははっつ!!!!」

二人して大爆笑するものだからこっちはどうしていいのかわからなくなる。反射的に顔を上げてしまい、後悔した。

なにに、って？ そりゃもちろん……、

「あー、篠田ちゃんってやっぱり天然だね。」

「だな、同感。」

私の目に映ったのは、笑顔で話しかけてくれる人たちだったからだ。

この世界は汚れていて、さびしさとか悲しさとかそういう気持ちにしかないものばかりあると思っていた。

だから無意識に人の表情をみて行動してしまつて、後悔する。後味の悪い気持ちを心にためて生活していたことに。なんで我慢していたんだろう、と。

「な！　ち、違うもん……。」

「いーや、天然だし。」

そついつて二宮君は私に微笑みかける。

「そういうところも可愛いんだよね。」

と、飛び切りの魔法の言葉つきで。

思わず固まってしまった。笑おうとしても、うまく笑えなくて顔の表情が一時停止する。

「あ、俺この後先生に呼ばれてんだった。んじゃ、篠田ちゃんはいばーい。」

「なんでそれを早くいわねーんだよ！！　じゃな、篠田！」

二人はパタパタと走って行った。
廊下には私一人残された。

動けなかった。

今のは、狡いと思った。深い意味はなかったとしても相手が勘違いしてもおかしくはない。言われた後に気付いたけど、遅かった。
今日は遅いことが多いな

そう、気付くのが、遅かった。

この気持と、

私はこの笑みを、

つづけることに。

知

気付かないふりをしてた。あの時の男子生徒が二宮君だなんて。

確信がなかった。人とかかわることを避けてきたし、恋なんて怖くてできなかった。

それは心に、初恋の人がひっかかっていたから？
それとも、別の理由があるの？

分からないことはたくさん。知らないきやいけない、ううん。知りたいと思うこともたくさん。知

でもこの気持だけは分かる。

私は二宮君が、好き。

だってあの時が――、

私の、初恋だったから。

気付いた心。(後書き)

自覚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0408x/>

嘘つき少女。

2011年11月21日10時54分発行